



Title	中国語のアスペクト体系の再構築に向けて： “了”・“著”・“過”を中心に
Author(s)	劉，綺紋
Citation	大阪大学，2004，博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/45770
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 ＜a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed >大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	劉 綺 紋
博士の専攻分野の名称	博 士（言語文化学）
学 位 記 番 号	第 18964 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 16 年 6 月 28 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学 位 論 文 名	中国語のアスペクト体系の再構築に向けて－“了”・“著”・“過”を中心－
論 文 審 査 委 員	（主査） 教 授 深澤 一幸 （副査） 教 授 春木 仁孝 助教授 渡邊 伸治

論 文 内 容 の 要 旨

本論は、中国語のアスペクト体系の再構築に向けて、“了” “著” “過” という 3 つの文法アスペクトのマーカーを中心に、それぞれの基本的機能を明らかにし、そのさまざまな機能・用法に対して一貫した説明を与えるを試みるものである。

中国語のテンス・アスペクトの範疇が初めて注目されたのは、19 世紀になってからである。その後、黎錦熙 (1924)、呂叔湘 (1942-1944)、王力 (1943-1944 ; 1944-1945)、高名凱 (1948) などが中国語のアスペクト体系の骨格を作り上げ、Яхонтов (1957)、Chao (1968)、Li & Thompson (1981)、Smith (1997) などが中国語のアスペクト体系を充実させた。しかし多くの問題が未解決のままである。その中でも、“了” というマーカーに関する問題点は特に多い。本論の最も主要な目的は、この“了” に対して、従来の中国語のアスペクト研究にはなかった新たな方法を用いて、より包括的で一貫性のある説明を与えることである。そこで本論は、“了” を理解するための基礎として、まず“過” と“著” について考察し、その上で“了” について論じた。その具体的な構成は、次のようである。

序論

第 1 部「出来事パーフェクト」のマーカー “過”

第 2 部「状態化」のマーカー “著”

第 3 部「限界達成」のマーカー “了” ——アスペクト機能を中心に

第 4 部「限界達成」のマーカー “了” ——アスペクトからモダリティへ

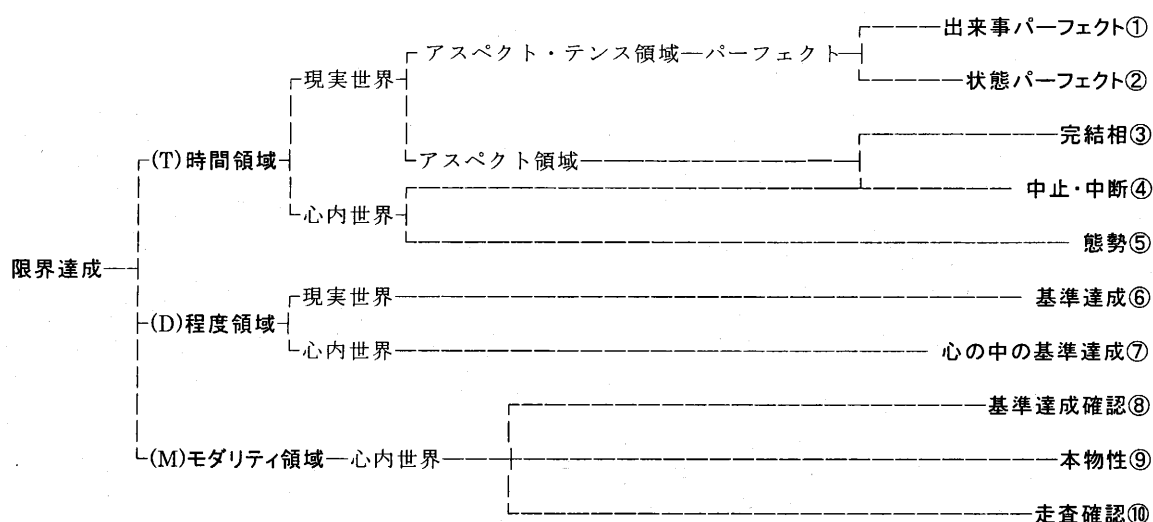
結論

本論は、以上のような構成で、先行研究の成果を踏まえながら、表面化されたさまざまな言語現象を十分に把握した上で、言語における普遍性と中国語の独自性とに着目しつつ、文脈を考慮し、「事象アスペクト (situation aspect)」 (語彙アスペクト (lexical aspect)) との関係性を踏まえ、根底にある本質的な原因を掘り下げた。その結果、“了” ・ “著” ・ “過” のそれぞれの基本的機能が明らかになり、また “著” との比較の中で、“在” のというアスペクトマーカーの基本的機能が明らかとなった。以下に、“了” ・ “過” ・ “著” ・ “在” の順番で、それぞれの定義と機能を述べる。

(I) アスペクト助詞“了”：中国語の限界達成のマーカ―

“了”は、構文中において「動詞直後」と「文末」という2つの位置に置くことができ、しかもアスペクト機能などの時間的機能と、程度機能・モダリティ機能などの非時間的機能を持っている。従来の研究では、動詞直後の“了”は「完成・完了」や「完結相 (perfective)」という機能を持つとし、“了₁”や「アスペクト助詞の“了”」や「動詞接尾辞の“了”」などの用語で呼んでいる。一方、文末の“了”は「変化・実現・新事態の発生」などの機能を持つとし、“了₂”や「語気助詞の“了”」などの用語で呼んでいる。このように、従来の研究は、2つの位置の“了”を「2つの同音同形異義語」とし、また“了”の非時間的機能については一切説明を与えてこなかったのである。

それに対し本論は、2つの位置の“了”を基本的機能を同じくする1つのマーカ―と想定し、“了”の機能を分析した。その結果、“了”の位置にかかわらず、そのいずれの機能も、「限界達成」というスキーマによって結び付いていることが明らかとなった。このことを、次のような図式で示すことができる。



これらの下位機能のうち、「③完結相 (perfective)」は“了”の代表的な機能であると言える。“了”の完結相とは、その事象における限界の在り方に応じて、その事象の何らかの限界へと達成したという意味の完結相、すなわち「限界達成という意味の完結相」である。従来の研究で言う「完成・完了」や「変化・実現・新事態の発生」などの意味は、いずれも「限界達成という意味の完結相」という機能の現れである。

また、①「出来事パーフェクト」、②「状態パーフェクト」、④「中止・中断」、⑤「態勢」などは、事象時と参照時との関係、プロファイルされる部分の違い、時間軸が現実世界にあるか心内世界にあるかなどの点で、③「完結相」とは異なっている。しかしこれら①～⑤の機能は、いずれも「時間軸における限界達成」の操作を行なう、という点で共通している。

また、⑥「基準達成」、⑦「心の中の基準達成」では、「基準達成」は“了”が現実世界の程度軸上でその操作を行なうのに対し、「心の中の基準達成」は“了”が心内世界の程度軸上でその操作を行なう点で異なっている。しかしそのどちらも、「程度軸における限界達成」の操作を行なう、という点でまったく同じである。

また、⑧「基準達成確認」、⑨「本物性」、⑩「走査確認」では、「基準達成確認」は“了”が程度領域でその操作を行ない、「本物性」は概念領域でその操作を行ない、「走査確認」はもっと広い意味での領域でその操作を行なう、という点でそれぞれ異なっている。しかし、そのいずれの操作も「2つの相反した領域に対して走査した上で、結果的にはその中のある領域が選択されて属性として確立する」という点で共通している。

以上のことから、“了”が動詞直後にあるか、文末にあるか、あるいは形容詞直後にあるかにかかわらず、またアスペクト機能を担うか、程度機能・モダリティ機能を担うかにかかわらず、そのいずれの場合の“了”も、「限界達成」という共通したスキーマによって繋がっている、ということが分かった。そこで本論は、“了”を中国語の「限界達成のマーカ―」と定義した。

(II) アスペクト助詞“過”：中国語の出来事パーフェクトのマーカ―

“過”は、「完了」と「経験」を表すことができる。そのため、多くの先行研究は、「完了」の“過”（“過₁”）と「経験」の“過”（“過₂”）と、“過”を2つのマーカーとして区別してきた。この点について、本論は“過”のタクシス（*taxis*）的意味・テンスの意味を検証した結果、「完了」の“過”であるか「経験」の“過”であるかにかかわらず、“過”は基本的にパーフェクト（*perfect*）のテンスの意味を持ち、「出来事パーフェクト」という機能を担うことを明らかにした。そこで本論は“過”を「出来事パーフェクトのマーカー」と定義した。

さらに本論は、“過”の基本的なアスペクト操作は「終結点通過」であることを明らかにした。「終結点通過」とは、何らかの事象と結び付いた場合、その事象が動的であるか静的であるかにかかわらず、また結果状態を生じるかどうかにかかわらず、すなわちその事象の事象アスペクトにかかわらず、いずれもその事象における「最終局面」を通過していることを表す、というアスペクト機能である。

“過”はいかなる事象と結び付いた場合も、その事象全体が終結していることを表す。また「不連続性（*discontinuity*）」、という意味論の特徴を持つため、状態パーフェクトの機能を持たない。これらはすべて“過”の「終結点通過」というアスペクト操作の現れである。また、“過”の出来事パーフェクトの機能や完結相の機能は、“了”の出来事パーフェクトの機能や完結相の機能とは大きく異なっているが、それも結局は「終結点通過」というアスペクト操作の現れである。つまり、出来事パーフェクトのマーカー“過”は、「終結点通過」という基本的スキーマを持つ、ということである。

（Ⅲ）アスペクト助詞“著”：中国語の状態化のマーカー

“著”は、出来事に対しても、状態に対しても、超時的な属性に対しても、いずれも静的で持続的で左右開きで時間性を持つ「状態」として述べ、「状態化」の操作を行なう。そこで本論は、“著”を中国語の「状態化のマーカー」と定義した。

（Ⅳ）時間（アスペクト）副詞“在”：中国語の過程化のマーカー

“在”は、静的局面をプロファイルすることはない。また、（動的でかつ持続的な）過程を本来的に持たない事象と結び付いた場合、それをエネルギーに述べたり、引き延ばして述べたりする。“在”はいかなる事象も過程化して述べる。そこで本論は、“在”を中国語の「過程化のマーカー」と定義した。

このように、本論は中国語のアスペクト体系の再構築に向けて、“了”・“過”・“著”・“在”のそれぞれの基本的スキーマを明らかにした。この点を明らかにすることにより、これらのマーカーの機能や用法のうち、本論で考察したものはもちろん、たとえまだ考察していない機能や用法についても、これらのスキーマによって演繹して説明することができ、そのような機能や用法として現れる原因を説明することができると考える。

以上が、本論の要旨である。

論文審査の結果の要旨

本論文は、中国語のアスペクト体系の再構築に向けて、“了”“著”“過”という3つの文法アスペクトのマーカーを中心に、従来の中国語のアスペクト研究にはなかった新たな方法を用い、それぞれの基本的機能を明らかにし、そのさまざまな機能・用法に対して、より包括的で一貫性のある説明を与えたものである。

著者は、まず序論で、上記の3マーカーにたいする中国・日本・欧米の主要な先行研究をきわめて周到かつ丁寧に読み解き、中国語の事象アスペクトを6種類に分けたのち、第1部では、従来「完了」あるいは「経験」をあらわすマーカーとされてきた“過”の主要な機能が、「終結点通過」というアスペクト操作による「出来事パーフェクト」であることを明らかにしている。この論証に際して、Smith（1997）の提起した「不連続性」の視点を導入したことは、特筆してよい。

第2部では、“著”が、出来事に対しても状態に対しても超時的な属性に対しても、静的持続的で時間性をもつ「状

態」として述べる「状態化のマーカ―」と定義すべきことを、静的局面をプロファイルすることはなく、また過程を本来的にもたない事象と結びつくエネルギーに、引き延ばして述べたりする「過程化のマーカ―」「在」と対比させて、わかりやすく説明している。

第3・4部は、この論文の中心をなす部分であり、従来の研究では動詞直後の「完成・完了」をあらわす「アスペクト助詞」と文末の「変化・実現・新事態の発生」機能をもつ「語気助詞」として「2つの同音同形異語」とみなされ、まだその非時間的機能については説明のなかった“了”が、じつは「限界達成」という基本的機能を同じくする1つのマーカ―であることを、欧米の認知言語学の理論などを参照して非常に説得的に論証している。この部分は、非常にオリジナリティーの高い、画期的な内容であるといえる。著者の独創といっても過言ではない。

全体からいえば、本論文は、3つのマーカ―にまつわる多くの解明し難い問題を、すべて余すことなく拾い上げたうえ、他の言語との比較などによって粘り強く個別に解答を与えるのみならず、それが全体を統一した体系として論じることにもなっているという、きわめてすぐれた特質を持っている。それは、理論と記述とがきわめてバランスがとれているからである。その結果、論旨が明快で、読みやすいものとなっている。ただ、“了”の概念領域として、アスペクトと程度とモダリティーの3つに分けているが、これら3つの概念領域の分け方とその関係については、再検討が必要だろうが、論旨に大きな影響を与えるものではない。

以上のように、本論文は博士（言語文化学）の学位請求論文として十分に価値あるものと認められる。